**№37　テーマ『良い人間関係をつくる実力』**

**講話日2014年9月12日**

**皆さんこんにちは。急に秋めいてきて、空気は本当に爽やかな感じになってきました。今年は本当に集中豪雨と言うか、凄い豪雨で被害があちこちで起こって心配ですけど、建築に携わる皆さん方にしてもやっぱり土石流とか集中豪雨で川が氾濫するとか、建築上いろいろ考慮して家を建てなければならないこともあると思うので、非常にそういう意味では心を悩まされている方も多いんじゃないかなという風には思っています。今日のテーマは、「良い人間関係をつくる実力」ということでお話をさせてもらいたいと思っております。**

**実際、人間関係で悩み苦しんでいる人が多いのが実情であります。単に離婚の激増、幼児虐待、高齢者への虐待というだけのことでなく、本当に些細な日常の人間関係上で何かこう気持ちがうまく噛み合わない、なんかちょっとこうすきま風が吹いてうまくいかないということもあるでしょうし、また恋愛をなさってる方々もなんかこうちょっと気持ちが通じ合わなくて、恋愛においても悩むという方も多いんじゃないかと思います。とにかく人間関係というのは社会の中で生きる我々にとって、誰しも避けることのできない非常に大きな人生の課題・大問題だという風にも思われるわけですね。なぜ、良い人間関係をつくる実力を求めていく努力をしなければならないのか。誰しもが命の根源から湧き上がってくる欲求として、できることなら皆と仲良くやっていきたいという気持ちを持っているんですよね。喧嘩したいとか戦争したいとかそういう風な欲求は持っていません。**

**では、なぜ命からそのような欲求が湧いてくるのか。それは、確実に人間ではなく、母なる宇宙の力によって命はつくられましたので、命の根源から湧いてくる欲求には母なる宇宙の思いが込められているとも言えます。母なる宇宙からすれば、自分の産んだ子どもたちが皆で仲良く信じ合って生きていってくれることを願っているはずなんです。母の願いであり、思いであり、祈りであると。人間の命の形自身も母なる宇宙の摂理によってつくられたものですから、人間として正しく生きるということは、確実に人間という命に込められた母なる宇宙の思いを生きるということであり、祈りと願いに応える生き方である。そういう意味では、我々は良い人間関係をつくる努力をし、素晴らしい人間関係をたくさんつくるという生き方をするのは、まさに命をつくったお母さんの願いに応えて、本当に人間らしく生きるということを実践することになると思われるわけです。そのことは、人間として最も尊い生きる目標だと考えなければならない。**

**だけどもやっぱり今残念ながら多くの方々がその人間関係でいろいろ思い悩んで苦しんでいることも現実ですので、どういう風に我々は人間関係の問題を考えていったら良いのか。どうすれば人間関係の悩みを乗り越えて、素晴らしい人間関係をたくさんつくって幸せになるという生き方ができるのかということを考えなければならないと思います。仕事の上でも同僚との人間関係もあるし、上司との人間関係もあるし、部下との人間関係もあるし、またはお客さん・取引先との人間関係もある。さまざま、多々あると思います。そういう問題にどういう風に対応したら良いのか、これは仕事の上でも非常に大事な課題だと思われます。**

**人間関係というのは、基本的に愛の働きによって出てくるものですので、つまり愛の課題とも言えます。そういう意味では、人間関係に問題が出てくる原因として我々は三つのことを考えなければならない。人間関係に問題が生じてくるのは、あまりにも理性的・合理的・理屈で物事に対応してしまっていて、人間の心情、気持ちをあまり考えないということから、いわゆる情に流されてはならない・ほだされてはならない、感情に振り回されてはならないとか、そのために常に冷静に理屈で合理的に物事を処理するということが近代ずっと行われてきました。そのために心が満たされないという思いを多くの人が持って、ストレスを感じ、悩んでいるのが、今日の社会・会社の問題だと言えます。人間にとって情や人情、感情など、心ほど大事なものはない。理屈がどれだけ通っても心情的に自分が納得できることがないと、何事もうまくいかないというか、本音では真剣に関われないようなことになってくる。理屈も大事なんですけど、もっと大事なものは心であり、気持ちであると考えなければならない。人の気持ちを無視することほど、恐ろしいことはない。世の中には恨みや敵対心や反感に基づく犯罪が日常的に頻発している状況です。**

**皆さんもご承知かと思いますけど、ソクラテスという哲学の祖と言われる、これは古代ギリシャの哲人でありますけど、立派な人だと尊敬はされてるんですけど、だけどもソクラテスの終末は、人民裁判にかけられて死刑を言い渡され牢獄に放り込まれて、その中で自ら毒杯を仰いで命を断つという。そういう人生の終わり方だったんですよね。なんでそんな立派な人物が裁判にかけられて死刑を言い渡されて、牢獄で死ぬという不幸な結末に陥ってしまったのか。その原因が、実はあまりにも理性的に人を責めて責めて責めまくって、相手の心情や気持ちを考慮することなく、正しいことをただただ主張し続けるという活動だったんですね。これも学校で習われてご承知だと思うのですが、ソクラテスの有名な言葉として「汝自身を知れ」という言葉と「無知の知」というものがあります。本当の正しい知識を人々に求めさせていこうと思ったら、現在自分が真なる知に対していかに無知かということを自覚させないと、本当に正しい知識を求めていくという気持ちにさせることはできないと考えた。多くに人にわからせようとして、無知の知という活動をしたんですよね。それが汝自身を知れという、自分自身を知る・現状の間違った状態をちゃんと知って、人間として正しい生き方を求めていくべきだと考えて、「汝自身を知れ」や「無知の知」というものを使って、多くの人と対話をしました。古代ギリシャのアテネにおいては、多くの市民が議論をすることが日常であったようです。多くの人の前で自分の無知をさらけ出し、暴かれた人は皆、ソクラテスを恨むことになった。そのように、相手の気持ちや心情を無視して正しいことを言って主張することは立派なんだと、活動をしていったのがソクラテスでした。いわゆる説得の論理、人を説得して相手の考えを論破して自分の考えに引きずり込むというものを開発した哲学者だったんですね。あまりにも理屈・理論で正しいことで相手を言い負かすというようなことをやったものですから相手の心は傷ついて、恨みを買ってしまうということになっていきました。**

**これは日常、仕事の中でもついつい正しいことが大事なんだと、相手の心情・気持ちを考えていたのでは正しいことが言えないと、相手の心情・気持ちに振り回されることなく、仕事をするべきだと思っている人が多いと思います。しかし、そのことによっていかに相手の恨みを買うことになるのかということも、よくよく考えていかなければならないわけであります。ちょっとした自分のひと言が相手にとってはとても心の傷つく言葉であることも往々にしてあります。自分のわからないところで相手の恨みを買っていることもあります。**

**そういうことからすると、いかに正しいことを言うからと言っても、相手の気持ちに配慮しながら言わないと、とんでもない恨みを買うことになると、我々は考えるべきなのです。いかに正義と言えども、人の心情を傷つけるようなことがあるのでは、その正しさは悪であり、それを行う人は悪人なんだという倫理観をこれからは持たないと、正しいことを言うがゆえに人の恨みを買うという生き方から脱却できません。もちろん、正しいことを言わないといけないのですが、相手の心情・気持ちを害さないような、嫌な思いをさせないような言い方、言葉遣いで相手に伝える…細心の配慮を持って物を言うという自覚を我々は持たないといけません。失言というものはできるだけないように細心の注意を払って、人には言葉をかけるべき。このことも仕事の上の心得としてよく考えてもらいたいです。ちょっとしたことが殺人事件になってしまうことが、最近は本当に多いです。このように人間関係が壊れていくことを人倫の崩壊と言います。**

**人倫の崩壊の原因として、どのようなものが考えられるか。日本だけでなく、世界の、全人類の共通の課題であります。直接的な原因として我々が知っていないといけないことは、第一番目は、人の感情を無視して理屈だけで人に対応する。これが自分自身の問題。**

**二つ目は、理屈ばかりで相手の心を無視して喋るのは、愛の欠如と言います。愛の未熟さ。これは、求める愛から与える愛へと成長していくもので、愛されたいという気持ちが強いのは、まだ幼い、子供っぽい愛なんですよね。大人になっていくほど、愛を与えることに喜びを感じるような成長を遂げます。お父さんお母さんになれば、自分の子どもに見返りを求めずに無償の愛を提供する、そういう気持ちにはなっていくわけです。求める愛から与える愛へと成長していくんだけど、なかなか与える愛、与えることに喜びを感じることよりは、大きくなっても大人になっても、求める愛が強いという人もいます。これが自分の中にある人間関係が壊れている原因としてわかってなければならないことなんですよね。愛されたいという気持ちがあると、愛されても「まだまだ足りない」という気持ちになって、相手をなじる・責めることになってしまうんですね。**

**三つ目は、愛しているつもりの愛。愛していると言っていても相手には伝わっていない。いわゆる自己中心的な愛、身勝手な愛というものがよくあります。親になっても子どもを愛していると言うけれど、親側からの愛であって、子どもが求めている愛ではないということがよくあります。子どもからすれば、「全然俺のことなんかわかっていない」と言って、自分が本当に愛されているとは感じていないようなことが子どもの心情としてよくあります。また、会社派の経営なんかでも、経営者は社員のことを考えていると言うのだけれど、社員からしたら「全然社長は俺たちのことをわかっていない」という不安を感じる。これが愛しているつもりの愛、身勝手な愛、自己中心的な愛と言います。恋愛中の男女においてもよくあります。自分は愛していると言うのだけれど、それは相手が求めている愛ではない。自分が愛していると思っているだけであって、本当に相手がどういう愛され方を求めているのかをわかっていない。自分勝手な仕方で愛が壊れてしまうということもよくあるんですね。**

**人間関係が壊れる上で自分が原因のものを三つ申し上げました。愛の欠如・未熟さ・身勝手さ、これが恋愛においてもいろんな人間関係においても、壊れる結果を呼び起こす原因になります。今後はもう少し学問的に根本の原因はどこにあるのかを考えていくと、レジュメに書いてある通り、五つの原因が出てきます。**

**まず第一番目は、「権利を主張する民主主義社会」。これそのものが人間関係を崩壊させる原因を孕んでいるという認識が今日必要だということです。一見すると民主主義社会というのは良い社会の代名詞のごとく使われていますが、だけども実態を学問的に研究していくと、実は民主主義社会は権利を主張するところから始まった社会の在り方なんですね。民主主義社会は義務を言わないで、権利を強調するという傾向性があります。本来、権利というのは義務を果たした者にのみ与えられるものですが、近代の民主主義社会は義務を果たさずとも権利は生まれながらにあるという人間観で出発しています。皆があまりにも権利を主張しまくるというか、権利を意識し過ぎて自分を守ろうとするような生き方が非常に強いです。自分の権利を主張するということは、相手も自分の権利を主張しますので、お互いに権利を主張し合って、結果として責め合うという構造が生まれてくるわけですね。だから、民主主義社会の実態は責め合う社会なんですよ。民主主義社会の政治は与党と野党が責め合う。民主主義社会の裁判は検事と弁護士が責め合う。民主主義社会の経済は労使が責め合う。民主主義社会の家庭は夫婦・親子が責め合う。その関係がなかったら物事は動かないんですよね。民主主義社会は決して理想的な社会とは言えません。お互いに足らざるところを責め合えば、まさにこの世は地獄と化す。本当に今、人倫の崩壊という地獄のような苦しみを人間関係で味わっている人が多くなってきている…その原因を我々は民主主義社会そのものに原因があると考えていく必要があります。ですので、民主主義社会は我々が目指すべき理想の社会ではなくて、もはや終わったのだと。もっと素晴らしい社会とはなんなのかということを考えて、それを求め、そういう新しい社会をつくっていくことを考えなければならない時代に入っているという時代認識を、持ってもらいたいと願っているわけであります。決して我々が目指す最終目標ではない、もっと素晴らしい社会の在り方を求めていかなければならない。そのことを人倫の崩壊が我々に要請しているんだと考えなければならない。**

**二番目の人倫の崩壊の原因は、「愛の理性化」ですね。これは、近代は人間の本質は理性だと考えられ、人間そのものが理性化され、理性の奴隷と化したというのが今の人間の状況であります。なぜそうなったのかと言うと、理性は神から人間に与えられた完全な能力だと、しかし人間は不完全だ。不完全な人間は完全な理性の判断に従わなければならないと。理性的に考えて正しいと思うことを人間はしなければならないと。結果として人類は理性の奴隷と言われるような状況になってしまって、人間性はなくなってしまった。人間性は理性化されて、本来の血の通った温かな心は破壊され、なくなってしまった。それにより、人間は同じ考え方の人しか愛せない、考え方が違えば敵だと。同じ価値観の人としか仕事はできない。価値観が違えば 一緒に仕事ができるはずはない、これが理性化されてしまった理性の奴隷と化した人間の判断なんですね。だけども、我々がこれから生きていかなきゃならない社会は、個性の時代と言われて考え方が違っても価値観が違っても感じ方が違っても宗教が違っても、それでいいんだと。いろいろと違う人たちの集まりが社会なんだから、その中でどう我々は仲良く生きていったら良いのかがこれからの我々に要求されている課題だということなんですよね。**

**しかし、そういう状況に陥ってしまっている。これをよく考えてみたら、自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけないという人は、実は自分しか愛せない人間なんだ。自分しか愛せないような愛は偽物。自分しか愛せないような愛でどうして子孫が残せようか。本来、愛は男が女を愛し、女が男を愛するということ。自分と違った者を愛するというところに愛の原点があるにもかかわらず、理性化された愛は同じ考え方の人しか愛せない。同じ宗教の人しか認められない。同じ価値観の人しか一緒に仕事ができない。愛すら理性化されてしまって、愛の本質が忘れられてしまっているという状況にあるんだということ。これも重要な課題として覚えてもらいたいです。自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけないという人は、実は自分しか愛せない人間なんだ。自分しか愛せないような愛は偽物。ほとんどの人がそういう愛に陥ってしまっている。相手が自分に同意してくれないと一緒に生きていけない意識になってしまっている。皆、自分しか愛せない人間になってしまっている。自分とは違う人間を愛する力がなくなってしまっている。なぜ、理性化されると自分と同じ考え方の人しか愛せないのか。理性は真理はひとつと考えますからね。だから、いろいろな考え方があると、どの考え方が正しいのか決着をつけようとなり、自分と違う考え方を否定するような結果に陥ってしまう。また理性は矛盾を排除し、画一性を追求する。個性を認めない、許さない。つまり、理性化された人間は、同じ人間しか愛せないということになっていくんですね。ここにさまざまな性格、価値観、考え方が現実にはあるのに、それが認められず、人を責めるような結果になってしまう。愛が理性化されてしまったがゆえに、人間関係がズタズタに切り裂かれていってしまっているんだと。**

**三番目は、「愛が文化になっていない」。愛はまだまだ自然発生的な情緒・感情・本能・情熱というような状態に愛は放置されています。まだ愛は、人間が人生を生き抜くだけの文化になっていない。なぜ、愛を文化として成長させないといけないのか。それは、人間は文化をつくる動物だと言われておりまして、人間は自然の中で生きることができる存在ではない。人間というのは、自分自身がつくった文明と文化と歴史の中で生きるという存在で、それが人間が人間らしく生きることができる環境なんですね。人間以外の動植物は自然の中で生きてるんですけど、人間は自然の中で生きることはできない。だから、自然に手を加えて文化・文明・歴史をつくる。そして自分自身がつくった文化・文明・歴史の中で生きる。これが生きる環境、人間が人間らしく生きる環境と言えます。そういう意味で我々が人間らしく生きるためには、愛も自然発生的なものとして放置してはいけない。愛を文化たらしめる、そういう人生を生きる力にしていくことができないと、愛を文化にしないと、我々は永久に愛という感情に振り回されて悩み苦しむという状況から脱却することができません。**

**次の第四番目は、「愛は学問的に研究されていない」。これまで愛は文学のテーマであって、学問の研究対象になったことがない。なぜ、ならなかったのか。愛は理屈を超えたもので理屈抜きのものと考えられていたから。その結果として、理屈で理性で物事を研究する対象にならないとして除外されていた。文学の中ではこれ以上何も言うことがないと、語り尽くされたとされ、あらゆる愛が残されています。ですので、愛について新しいことを言うのはできないくらい語り尽くされた印象があります。ドラマでも殺人事件が主となっています。愛がテーマのドラマなのに最終的に殺人事件になって、人が殺されて終わる感じになってしまっている。純粋な愛が語られることが少なくなってしまい、その結果として韓国の純粋な淡い男女の美しい物語が大ヒットしました。韓流ドラマの愛の物語が懐かしく思えるほど、日本では愛について語り尽くされた状態になってしまいました。だけども、愛はまだ学問的に研究されたことはない。さまざまな愛のバリエーションが語られるほど、かえって人間は愛に惑い、悩むことになってしまう。いろいろな愛があるとわかるほどに自分自身の愛を決め難くなり、愛に悩み苦しむことになってしまう。そんなところから脱却しようと思ったら、学問的に愛を研究して本質と理念に目覚めることがないと、我々は愛を人生を生きる力に変えていくことができません。そういう意味でも愛を文化足らしめるということが必要になります。いつまでも愛を自然発生的な情緒・感情・本能・情熱という次元に留めておいては、愛は永遠に悩み苦しむ対象になってしまって、人生を生きる力に変わっていかない。**

**最後の五番目は、「愛を能力と考えていない」。愛を能力と考えないと愛を成長させることはできないですね。愛を感情や情緒、本能と考えていると愛は成長しません。愛を能力と考えて初めて、愛は成長することができます。愛は理性と同じように能力なんだと考えなければならない…そういう時代になってきてるんだ。しかし、まだまだ世界には愛を理性と同じように能力なんだ、問題解決できるような能力なんだと考えてる人はほとんどいないのが現状であります。だから我々は人間関係の問題を処理して、乗り越え、力強く生きていくという力をまだまだ人間は持てないで苦しんでるんですよね。愛を能力と考えることによって、理性によってつくられた問題を愛の能力によって乗り越えていくことが初めて可能になってくる。愛は理屈を超える力と言われ、理性で解決できない問題は、愛の力によって解決する他ない。しかし、残念ながらまだ愛は能力と考えられていない。現実的には、理性・理屈を超える力に愛はなっていないんですね。**

**なぜ愛は理性・理屈を超える力と言えるのか。理性では考え方の違う人とは生きていけません。理性は矛盾を排除しますから、考え方の違う人とはやっていけないんです。だけど、人間が社会を生きるには考え方の違う人、価値観の違う人、宗教の違う人と共に生きていかなければならない。考え方の違う人と生きることを矛盾を生きると言います。矛盾を生きる力こそ愛の力なんだ。愛の力を成長させることによって矛盾を生きる能力を獲得する。理性では矛盾を生きられない…どうしたら考え方の違う人、価値観の違う人、宗教の違う人と共に生きていけるのか。そのために要求されるのが、愛の力。愛はまさに理屈を超える力、矛盾を生きる力である。愛こそ理性に勝る、理性よりも高度な生きる力なんですね。愛があれば、考え方の違う人ともどうしたら一緒にやっていけるんだろうと考えられる。我々はこれから欧米・西洋人の矛盾を排除するような生き方から、矛盾を肯定して矛盾を生きるという生き方に人類は成長していかないといけない。**

**この矛盾を生きるという力を持っている民族がアジア人だ。欧米人は矛盾を排除する。アジア人は昔からインドの仏教も中国の儒教も老荘思想も日本の神道も皆、矛盾を生きるという生き方を最も深い生き方として持っているのが、アジアの文明であります。そういうことからも人類は矛盾を肯定して矛盾を生きるという時代にこれから進化していきます。その原理が愛、愛は矛盾を生きる力。理性では喧嘩になる。これから我々は平和を求めていかなければならない、平和を実践的に実現しようと思ったら、考え方・価値観・宗教が違っても共に生きていくことを考えて、方法を見つけ出していかないといけません。平和な組織、家庭というのは、矛盾を生きる力なしには実現されるはずはありません。そういう意味で我々は愛を能力と考えて、そして理性では解決できない問題を愛の力によって解決していく生き方をつくっていく必要があります。**

**申し上げてきたこの五つの原因によって、人倫の崩壊が行われてきたと言えます。これらの原因を踏まえながら、どうしたら我々は素晴らしい人間関係をつくっていく力を自分のものにしていくことができるのか。どうすれば良い人間関係をつくれるか。これを具体的に考えていかなければなりません。その方法として五つの原則があります。**

**第一番目は、「人間への深い理解」が要求されます。人間関係をつくるのですから、人間への深い理解なしには関係構築する力を成長させることはできません。それはどういうことなのか。大事なことは二つ。**

**一つは、人間は誰しも長所半分、短所半分だと言うこと。そういう構造を持って人間性は形成されています。どんな立派な人間でも他人から嫌われ、嫌がられ、非難されるところを半分は持っている。またどんな落ちぶれた人間でも必ず他人よりも優れたところを半分は持っている。長所も短所も半分ずつ持って、初めて人間と言える。こういう人間観をちゃんと持っていないと、素晴らしい人間関係をつくっていく力を自分のものにすることができません。短所があってはならないと考えれば、必ず人を責めます。そのことによって人間関係は壊れるんですね。短所がないと人間ではない、なければならない。また、短所も半分はあっていいんだとも言えます。これがわかっていないと、人間と長く仲良く生きていく力をつくることはできません。人を愛するということはその人の長所も短所も愛するということ。その人の短所を愛せないという人は、人間を人間として愛する資格がない人だ。しかし、なかなか短所を愛するということは難しいが、それをしないと人間を愛するということはできません。長所は愛せても短所を愛せない人は、神しか愛せません。本当に人間を愛そうと思ったら、長所も短所も認めて、許して、愛する力をつくっていかないといけません。これには大変な努力が必要です。短所を愛する努力をして愛は芸術となる。**

**異性に恋をするというのは、自然発生的な現象であって、子孫を残すために出てくる心情でもあります。愛は、人間が努力してつくっていく文化だ。人を愛するということはその人の長所も短所も愛するということ。短所も認めて、許して、愛する力をつくっていかないといけません。では、短所を許すためにはどうしたら良いのか。そのためには、短所がなければ人間ではないということを理解すること。短所があってこそ人間で、短所がなければ神様だ。なくす努力をすることは間違い。短所があることを開き直って、「いっぱいあるけどいいや」となってしまうのはいけません。短所があるだけでは動物、人間になるためには自分の短所はなんなのかと自覚すること。短所の自覚によって人間には謙虚さが生まれてくる。人間の本質は理性ではなく、心だ。謙虚な心をつくってくれる原理が短所なんです。**

**人間らしい謙虚な心、すなわち人間の心の本質をつくってくれるのは短所。短所がなければ謙虚になる理由がなくなってしまう。長所だけなら謙虚にはならない。短所が半分あって、初めて我々は謙虚さを命から滲み出てくるものとして持つことができる。短所があって初めて人間なんだ。短所があって初めて我々は本音で、本気で謙虚さを持つことができる。短所があるだけでは人間ではない。短所がなかったら短所の自覚を持てませんから、短所はなければならない。短所が出てくれば嫌われちゃうから、出てこないように注意をセントバーナードなんですね。短所が出てくると相手に嫌われ、迷惑をかけてしまう。短所はなくす必要はないけど、出てこないように注意をする必要がある。出てきたらすぐに謝る、この気持ちを忘れてはならない。失敗、うっかり失言した場合は、すぐに謝ることが不完全な人間の大事な生き方であります。**

**有名な孔子の言葉にもある通り、「過ちては改むるにることなかれ」。謝った場合、それを訂正することを億劫に思うことはないと。間違いだと気づいたのなら、すぐに謝れば良い。それが不完全な人間の正しい生き方なんだ。しかし、誤りだと気づいているのに謝らない・改めない…ここに人間としての本当の過ちがあるんだということです。さらにその言葉の続きとして、「人の過や、各々其のに於てす。過を観て斯に仁を知る」があります。「人の過や、各々其のに於てす」、人間がどういう間違い方をするのかは、その人の人格の度合いによって違ってくる。人間は不完全だから、間違いをしない人間はいない。どう間違うか、どのような間違い方をするかというところに、その人の人格の程度、人間性のレベルが出てくるということ。「過を観てに仁を知る」、どういう間違い方をするかを見ることによって、初めてその人の値打ち・本質がわかると、孔子は判断・人物眼を持っているわけです。良いことをしているのを見て、その人を判断するのではその人の本当の値打ちはわからない。どういう間違い方をするかにおいて出てくるんだ。**

**不完全な人間は、必ず失敗や間違いを起こす、でもそれは決してダメなことではない。それは不完全なのだから致し方ないことなんだ。決して間違いや失敗をすることを恐れてはならない。間違いをしても良い、失敗をしても良い…ことが起こったのなら、即座に謝る。言い訳、言い逃れをしない。そこに不完全な人間の潔さがあり、美学であり、美しい行為だ。言い訳や言い逃れは、人間として見苦しい、間違った生き方だとなるわけです。とにかく、人間には短所・欠点がある。人の短所を発見したら、責めてはいけない。それを責めるということは相手に完全性を求めることになっているんだ。人の短所は助けて役に立ってあげようと思うのが血の通った温かな心のある人間の対応であって、人の短所を責める人間には血の通った温かな心は微塵もない。人が失敗したり、人がうっかり間違ってしまったときには、役に立ってあげたり、助けてあげたいと思うのが人間的な血の通った温かな心あることの証明であって、人の短所を責めてはならない・人の失敗を責めてはならない。**

**一番短所を活かす上で大事なのは、短所を隠すのでもない、短所が出てこないように注意をするのでもない、むしろ自分の持っている短所を積極的にさらけ出しちゃったりなんかしちゃったりして、人に助けを乞う。「俺はここが苦手なんだ。なんとか助けてくれへんか」と、人に助けてもらったら、相手を尊敬して褒め称えて感謝をする。これが短所を活かすということなるんですよ。特に会社の地位、社会的地位が上がれば上がるほど部下が増えてくる。そして上司になればなるほど、実は自分の短所・不得手なところをさらけ出して部下に仕事をさせる。部下に助けてもらって、褒め称える。そういう生き方を覚えていかないと、個性の時代の組織を活力のあるものにしていくことができません。昔から言われる言葉ですけど、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」のように、人間が成長をしていって、地位が上がれば上がるほど威張るのではなく、短所や欠点、不得手なところをさらけ出す。そして、部下に仕事をしてもらい、助けてもらう。部下に感謝して、尊敬する。これが欠点の活かし方で、活心力と言います。人の存在を輝かせる力=活心力と言います。そうするためには、自分の短所や欠点をさらけ出す勇気が必要だ。この勇気がないと、本当に人を輝かせる、活かす力をつくることはできません。自分の短所や欠点をさらけ出して、部下に助けてもらい、褒め称える。これが短所を活かす生き方であります。**

**短所の自覚を与えなければ、人間はつくれない。だから、「君のダメなところ、短所はここだよ。その短所が出てくると君は嫌われちゃうし、損をするから短所が出てこないように注意をしようね」というのが短所の自覚を与えるやり方なんですね。短所を責めて嫌な思いをさせるんじゃなくて、「短所が出てきたら君は損をするし、人に嫌な思いをさせてしまうから、その短所があまり出てこないようにしようね」と、短所を自覚させる。そのようにして人間らしい謙虚な心を持った人間をつくることをしていかなければなりません。とにかく、短所をなくす努力をしてはいけません。またさせてもならない。その時間があれば、伸びる長所をとことん伸ばすことが大事な課題です。短所は放ったらかしでOK。長所が伸びて、他人から一目置かれるような力になってくると、短所は放っておいても人間の味になる、人間味に変わる。「あんなすごい力を持っている人間もこんなところがあるんだね」という具合に。「なんか人間として親しみを感じるよね」。こういう生き方を角熟と言います。**

**普通は円熟と言い、真ん丸となって角ばっているところが無い円熟ですけど、だけども人間は不完全ですから達成し難い。人間は失敗をしたり不得手なところもあったりと、がある。そういう個性的にいろいろがある人間が成長して完成されていく姿を角熟と言います。角ばったまんま、そのまんま東と申しましょうか、さんまのままで熟していくというのを角熟と言います。角熟というのは、辞書には載っていないことばです。円熟があれば、その対として角熟という言葉はあっていいと思います。いつかは、角熟も辞書に載る時代が来ると思っています。とにかく、長所を伸ばして短所を人間の味に変えていく。長所錬磨の角熟人生。とにかく、短所を責めてはならない・失敗を責めてはならない。これが人間への深い理解というものの第一の課題であります。**

**もうひとつは、人間の本質は理性ではない、心だということ。人間は誰しも本当に心を満たしてくれるものを求めている。理屈ではない、心が欲しいということ。これが現代人の偽らざる叫びであります。そのことをちゃんとわかって、人に部下にお客さんに対応しているかどうかを自らに問わなければなりません。人間への深い理解への第二番目は、人間の本質は心だということ。理屈ではない、心が欲しいということ。心が欲しいのだから、心をあげることをしなければならない。そのことによって初めて心の結びつき・繋がり・通い合い・絆がつくられていって、人間らしい温かな関係性が生まれてくる。叫びを皆があげているのに、まだまだ現実は理屈ばかりをあげている。夫婦関係も親子関係も学校も職場も理屈…あらゆるところで理屈しかあげていない現状がある。だから、多くの人が心を満たすものを求めていながらも、満たされないで苦しみ悩んでいるのが現実です。**

**では、心が欲しいとは何が欲しいのか。心をあげるとは何をあげることなのか。そのことはちゃんと分からないと心の絆をつくることはできません。実際問題、心をあげるとは何をあげることなのか。心の実質を占めるものは、意志と愛であるというのが、感性論哲学の考え方であります。人生で大事なものは二つしかない、意志と愛である。人間の本質である心というものは、実質的には意志と愛によって成り立っていると考えています。意志の力とは、物事を最後までやり遂げる力。愛の力とは素晴らしい人間関係をつくる力。この物事を最後までやり遂げる意志の力と、素晴らしい人間関係をつくる愛の力さえあれば、人生は何事もうまくいく。必ず幸せや成功は手に入る。我々が目指すべきは、物事を最後までやり抜く強い意志の力を自らのものにすることと、素晴らしい人間関係をつくる愛の力を自分のものにすることに最大の努力を傾けなければならない。それだけで十分なんだ。それ以外のことを考える必要はない。人間の心、本質、実質は意志と愛だ。故に意志を原理として出てくる欲求とはなんなのか。愛を原理として出てくる欲求とはなんなのか。そういうところから、心が欲しいとは何が欲しいのかが見えてくるわけですね。**

**意志を原理にして出てくる心が欲しいという欲求とはなんなのかと言ったら、認めてもらいたい・分かってもらいたい・褒めてもらいたい。注意されることも叱られることも批判もされたくない。まずは、認めてもらいたい・分かってもらいたい・褒めてもらいたいということ。だから、叱ったり、注意したり、批判したりしなければならないときもまずは認めてあげなくてはならない・分かってあげなくてはならない・褒めてあげなくてはならない。その次に注意すべきことをする。もう一度、クロージングで認めてあげて・分かってあげて・褒めてあげて終わる。そういう注意の仕方、叱り方を覚えないと、相手の心を傷つけてしまう。いかなる正義でも相手の心を傷つけるようでは、それは悪である。その正義を行う者は悪人となる。こういう高度な倫理観からするならば、例え注意・叱り・批判をしなければならない場合でも、そこから始めてはならない。まずは、認めて・分かって・褒めてあげなくてはならない。注意・叱り・批判はそれから。そしてもう一度認めて・分かって・褒めてあげなくてはならない。上司はその順序を覚えて、相手の心を傷つけること**

**なく注意・叱り・批判しなければならない。**

**どういう言い方で、どういう態度で、どういう表情で、どういう言葉遣いで言ったならば、相手の心を傷つけることなく叱られるか。こういう配慮が心遣いであります。それをしなかったら心無い叱り方になってしまうんだ。相手の心に傷をつける。それは恨みになって返ってくる。実際問題、会社では本当に注意したり叱ったり批判したり、あるときはぶん殴らなければならないときもあるかもしれない。だけど、どうしたらそれにもかかわらず、心の絆が断ち切れないような、相手の心を傷つけないような叱り方ができるか。これを考えていかないと成長しません。人間として成長しない。**

**これを考える上で一番参考になるのは、有名なスクールというドラマがありましたね。NHKのプロジェクトX でも放映されたもの。実際問題は、山口良治という日本ラグビー界の雄と言われた大選手が、荒れ果てた学校である京都伏見工業を立て直すために体育教師として学校に赴任する。ラグビーを通して子どもたちを立ち直らせていくというテーマのドラマであります。物語の中では滝沢先生と名前が変わって登場します。京都伏見工業を立て直すために不良を立ち直らせていくきっかけはどこにあったのか。ドラマ内ではわずか3年でラグビーの甲子園と言われる花園で頂点に立つドラマであります。どうして荒れ果てた学校でありながら、わずか3年で高校ラグビー界の頂点に立つことになったのか。その出発点はどこにあったのか。滝沢先生は学生たちに自覚を持たせるために対外試合をさせるんです。自分たちが弱いということはわかっていながら。すると結果は138vs0で負けます。その結果を見て、「お前ら悔しくないのか？ あいつらも高校生でお前らも高校生だ。同じだ。どこが違う？ お前らはゼロの人間だ。悔しくないのかー」と言って叱るわけです。「これから気合を入れる」と言って整列させて、「歯を食いしばれ！」と順番に鉄拳をくらわせていくんです。殴られた学生は不良ですので、「何を!? 」と先生に突っかかる。胸ぐらを掴みながらふと先生の顔を見ると、先生の目から涙が流れていた。それを見た瞬間に不良学生は胸ぐらを掴んだ手を離して、「ありがとうございました！」と言うんです。一人ひとり殴っていくのですが、倒されて立ち上がるときに先生の顔を見て、「ありがとうございました！」と。そこから京都伏見工業の大躍進が始まるんです。この先生なら信じられる、この人に付いていこうと。猛練習の末、わずか3年で高校ラグビー界の頂点へと登っていきます。ぶん殴っても心の絆が断ち切れるどころか、ますます心の絆は強くなって「この先生なら信じられる」と、先生の目に愛を見たんですよね。「これだけ俺たちのことを本当に真剣に考えてくれて、殴ってくれた」。「こんなに真剣に俺たちのことを考えてくれている人は初めて見た」。そういうことで皆が奮い立つ。ぶん殴ったって心の絆が断ち切れるどころか、ますます心の絆が強固になって、団結力を強めていく…そういうことが実際問題あったわけであります。**

**やはり人間関係にとって一番大事なものは、目ですね。目に愛があれば、どんなに酷い言葉でも相手の心に愛として通じる。どんないいことを言っても目に愛がなければ、その言葉は却ってよそよそしい。上っ面になる。いかに人間関係において目が大事か、愛が大事かと言うことをよく考えてもらいたい。とにかく、注意しながらも相手の心を傷つけないような、配慮を持った叱り方、注意の仕方を工夫して考えて、心遣いをしてやってもらいたいと。とにかく、意志を原理にして出てくる心が欲しいというものはなんなのか。認めてもらいたい・分かってもらいたい・褒めてもらいたいという心情。だから、我々は認めてあげる努力・分かってあげる努力・褒めてあげる努力しなければならない。それが心をあげるということ。また、愛を原理にして出てくる心が欲しいというものは、好きになってもらいたい・信じてもらいたい・許してもらいたい・できるまで待ってもらいたい。心をあげるには、好きになってあげる努力・信じてあげる努力・許してあげる努力・できるまで待ってあげる努力をすること。その努力をする姿を見せることが相手に愛を感じさせることになるわけです。欲しいに対してあげることで、確実に心の結びつきができます。心の通い合い、絆ができていく。これが、理屈に負けない強固な団結力を会社にもたらす力なんですね。**

**これまでの資本主義経済社会における会社は、仕事の結びつきと役職の結びつきだけで仕事をしていた。まさに合理的。そういった組織で働くことで、スピードと成果が要求されて、人間は疲れ果てて、ストレスを感じて病気になっていく。これからの組織に求められるのは、そういった理性的で合理的な組織ではなくて、組織の中に血の通った人間性があるかどうかが問われるわけです。組織というものに人間性を宿し、人間的な血の通った温もりをもたらすためには、会社・組織の土台に心の繋がり・結びつきを据えなければならない。なぜなら、会社と言えど人間の集まり、人間の本質は理性ではなく心だから。組織にも人間同様、心の繋がりをつくることで人間的な組織となる。理屈では壊れることのない心の繋がりという団結力を持って、会社に活力が生まれてくる。これが、これからの会社の人間的な会社の作り方であります。そういう温もりのある会社・組織をつくっていこうと思ったら、土台に心の繋がりをつくる。それには、心が欲しいという叫びに応じて心をあげるという行為を皆がすること。そのことにより、理屈を超えた心の繋がりという団結力が生まれてくる。これが人間的企業をつくる基本的な原理であります。**

**相手の良いところを見て、相手の良いところを見つめながら付き合うというのが、人間を好きになるやり方です。そういう付き合い方をしていかなければならないし、人と会ったらまずは相手の良いところが見えてくる人間にならないと、良い人間関係はつくれませんよね。とにかく、好きになってあげる努力・信じてあげる努力・許してあげる努力・できるまで待ってあげる努力をする。努力できなくなったら、愛はなくなったということ。相手のために努力できる限り、愛は存在する。相手が自分のことをどの程度好きなのかを知ろうと思ったら、相手が自分のためにどの程度の自己犠牲的努力を払ってくれるかを見ればわかります。自分が相手のことをどの程度好きなのかを知りたい場合は、その逆でわかります。愛の実証というのは努力なんですね。努力することによってしか、愛は相手には伝わらない。心をあげる努力をしなければならない。とにかく、人間の本質は心だ。心を満たす努力をする。これが第二番目の人間への深い理解お内容であります。**

**ここで前半を終わります。**

**それでは後半の話に入ります。**

**良い人間関係をつくる第一番目の原理は、「人間への深い理解」でした。第二番目は、「謙虚な理性」。まだまだ我々はあまりにも理性的に傲慢過ぎるというところが多々あります。自分の考えに対立するような人が出てくると、なんとなく嫌な気持ちになって、対立的な気分になってしまいやすい。自分が理性的に考えて正しいと思った結論は、正しいんだと思ってしまって、それと違った考えが出てくるとそれと対立してしまう。そういうことになって、敵対心が出てくる。それによって人間関係が壊れていきます。理性に対する信頼と言うか理性という能力を絶対的に信じるという意識が、根底にあるわけですね。現在、我々が信じている科学=サイエンスという自然科学とか、科学技術という学問を信じて、受け入れて生きてるわけですけど、だけど実際には自然科学という学問として研究されて出てきた真理というものを我々は受け入れて、その真理を持って自然に対応することにより、自然破壊という現象が起こってきたり、環境破壊、人間性の破壊という結果が出てきているのも現実であります。**

**ではなぜ、自然科学研究の結果、我々が手にした真理・知識を持って自然に対応することによって自然破壊という現象が生じてくるのか。それは、自然科学というのは物理学も化学も生物学も地質学・鉱物学も心理学も、いろんな分野に現実の世界をぶった切って、分けて研究して、この範囲ではこういうことが言えるという形で出てくるものが、自然科学における真理と言われるものなんですね。だけども自然科学というものは、物理学の法則と化学の法則とでは、どのように関係して働いているのかは全く研究していない。それぞれの分野で研究をしているだけで、本当の自然というのは、物理学の現象と化学の現象というように分かれて出てくるのではなく、あらゆる領域のものが全部有機的に絡み合って、一体不離の関係で皆がお互いに影響・関係し合って成り立っているものです。有機物の世界は、あらゆるものがお互いに影響を与えながら、相乗効果として全体が成り立っているのが、本当の自然なんですね。だけども、科学=サイエンスというのは、自然をいろんな領域に分けて研究をするわけです。それにより、科学そのものが自然の有機性を破壊するという仕方で研究を進めているわけです。だから、物理学の法則、化学の法則がどのように生物の世界に影響するのか、そういう研究が全くなされていないのが現実であります。本来の相乗効果を全く考えないで、自然に対応している。その結果として、科学が自然を破壊するという結果が出てくるわけですね。**

**環境破壊というのもあらゆるものが皆、有機的に絡み合っていて、その相乗効果として環境は成り立っているのに、その環境に学問的なある領域において成り立っている法則に基づいて、相乗効果を考えないで環境に対応してしまっている。だから、予想外、想定外のさまざまな影響・結果が出て、人間にさまざまな災いが降り掛かってくる…これが環境破壊と呼ばれる現象であります。**

**人間というのも理性・感性・肉体という3つの要素が絡み合って、その相乗効果として命が成り立っている。その人間の命を理性的にのみ取り上げて、解明して、人間の問題に対応することにより、感性や肉体の非理性的な部分を考慮しないで命や人生が処理され、語られていく。そのことによって、有機的に成り立っている人間性が理性によって破壊されてしまう。これが人間性の破壊=血の通った温かな心が消えることの原因であります。すなわち、自然科学というものが自然の有機性を理解・対応できない…ここに限界がある。これを私の感性論哲学では、ピンクレディーシンドロームと言っています。**

**ピンクレディーというのは、若い方はご存じないかもしれませんが、ミーとケイのふたりの女の子によるグループです。歌って踊るアイドルとして100万枚のヒットを連発していた。ミー+ケイ=2ではなく、100万という相乗効果が出てくる世界なんですよね。これが数学的合理性と言われるものを超えた有機的相乗効果の世界というものなんですね。理性では1+1=2が正しいことで、1+1=100万というのは間違いということになるわけです。これが理性的な判断の仕方であります。ですから、理性で物事を考えていくと有機的な繋がりから出てくる相乗効果が全く計算できない、わからない…これが理性の限界なんですね。実際はあらゆるものが有機的相乗効果で成り立っており、動いており、活動しているんだ。それを相乗効果が計算・理解できない理性によって対応することで有機性が破壊されてしまって、結果として自然破壊、環境破壊、人間性の破壊という命あるものは壊れていくという現象をつくり出してしまっているのが、現実のいろんな問題が出てくる原因であります。**

**これらのことから、理性を頼りにして生きていって良いのか？という問題が現在、出てきています。それが理性の揺らぎと言われていて、ようやく人類は理性への盲信から目覚め始めた。結局、理性とはなんなのか、理性を信じて良いのか。そういう疑問が今、出てきてしまっているわけです。そこで今一度、理性とはなんなのかをちゃんと考えていくと、産まれた瞬間は理性はない。脳があっても理性という考える力はない。脳は約140億個という脳細胞から成り立っていると言われていますが、脳があっても肉体であって理性ではないし、精神ではない。だけども、多くの脳生理学をやっている方々は、脳が存在することをもって、理性が存在するという証明に使っているわけですね。脳があるから理性能力は存在すると考えてしまっている。実際は脳があっても考えることはできません。考えるためには、脳細胞が人間がつくった言葉を覚えなければなりません。言葉は抽象概念と呼ばれるものですが、その言葉と言葉を事実に合うように結びつけていくことで、合理的に考える…そして結果が出てくる。これが理性なんですね。まず、理性能力というのは、言葉が持つ限界を背負っているんだ。言葉自身が抽象概念と言われて、現実には存在しない抽象的な内容を持つのが言葉ですから、言葉によって物事の実態、生きたものの姿は掴めないのが言葉の限界であります。言葉は人間がつくった抽象概念です。ですから、人間がつくった不完全さが言葉にはある。不完全な言葉と言葉を事実に合うように結びつけていく作業をすることによって、合理的に考えるという理性が出てくる。ですから、理性は原理的に言って言葉が持つ限界を背負っているんだと。**

**よく座禅とか瞑想と言われる修行では、本当に悟りたいのなら、物事の本当の実態を掴みたいのなら、まずは考えるなと言うわけですね。黙って座っておれというのが座禅のと言われる修行の仕方ですし、また真言密教の修験道では考えずに体を動かして大自然と直接命が触れる体験を持てと。そうすれば実態がわかると言うんです。言葉は抽象概念ですから、物事の実態から遠ざかるんですね。言葉では物事の実態は表現できない。言葉の表現からこぼれ落ちてしまうものがある。それを実態と言います。言葉では実態は掴めない本当のことを知りたいと思ったら、まずは肉体を動かして命を使って行動する。行動を通して掴んだ体験からしか本当のことはわからない。これが修験道で言うところの荒行ですね。体験・実感を言葉にするということです。そこから悟りというものが出てくる。これらが構造説明になります。つまりは、理性というのは決して完全無欠のロックンローラーではないんです。理性には限界がある。そのことを我々は知って、限界がある理性をどのように人間が使って生きていくかを考えなければならない。そういう時代に入ったということです。ようやく我々は理性に対する絶対的な盲信から目覚め始めた。理性に支配されるのではなく、人間が理性を支配して、使いこなして生きていくことをしなければならない。そういう段階に人類は入ったんだということです。**

**なぜ、我々は理性の奴隷になってはならないのか。理性に支配されてはいけないのか。なぜ、人間が理性を支配して、使いこなして生きていくことをしなければならないのか。理性能力というのは、人間が持っている脳という肉体に付随した能力が理性だと。だから、理性能力は人間が持っている能力のひとつに過ぎない。人間には理性以外にもっといろいろな能力がある。いわゆる潜在能力と言われてるものが人間にはあるわけですけど。潜在能力というのは、理性がその限界に達したときに命から湧いてくるもの。能力は決して理性だけではない。理性は人間が持っている能力のひとつに過ぎない。だから、理性は人間の部分なんだから、全体である人間が理性に支配されてはならない。人間が理性を支配し、コントロールして、生きていかなければならない。それがこれからの人間と理性の関係性であります。これから我々は理性というものをどのように考えていかなければならないのか。理性は合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力だという理解を持って、理性を使っていかなければならない。**

**なぜ、有限で不完全なのか。それは、人間=理性ではない。人間=理性であれば、理性は万能だ。理性もあれば感性もあり肉体もある。理性は人間の持っている要素の一部分だ。だから、人間を理性的に理解しようとすれば、確実に人間を理性的に歪めてしまうことになる。合理的に物事を考えるということは、物事を合理的に歪めてしまうということ。理性的に判断するということは、物事を理性的に歪めて解釈することなんだ、という風に我々は考えていかないといけません。理性で考えることは全て偏見なんだ。偏見というのは間違っているのではなく、正しいんだけど偏りがある。歪みがあるということは偏見。どんな立派な人間でも今自分の肉体のある場所からしか見えないし、今自分の肉体のある場所でしか判断できないし、今自分の肉体のある場所でしか考えられない。だから、肉体がある限り、常に偏見、偏り、歪みがあるんだと我々は自覚しながら理性を使わなければならない。自分の考えが偏見だとわかったら、自分と違う考えというものを参考にして、自分の考え方を他人の考え方を使って修正し、自分の考え方の偏りを修正しようと、そういう気持ちになることができるのが、謙虚な理性ということなんですね。**

**自分の考えを他人に押し付けるんじゃなくて、自分の考えは偏見なんだから、他人の考えを自分の考えに足してと言うか参考にして、自分の考え方の偏りや歪みを修正していきましょうと。それにより我々は自分以外の自分と違った考えにも価値や存在感を認めて、自分の考え方の偏りや歪みを修正していくという謙虚な生き方ができる。これがこれからの理性の使い方です。そうしないと、本当の正しい、生きた物事の実態には迫れない。**

**だけども、まだまだ自分の考えは正しい、他人の言うことは間違っているという独善的な理性の使い方をしている人が多くて、そのために考え方の違いで対立する…それが政治の政党に代表されるような論争に言えます。世界的に見てもいろんな対立が見受けられます。お互いに独善的に相手の非を論ずるという感じで議論が進められています。本当は、皆自分の考えは偏見なんだと思うことがまずは大事な出発点であって、自分の意見は正しいが、偏り・歪みがある…修正しようと思ったら他人の考えを参考にする必要があると考えることで、理性の独善性から脱却して他人を批判し、敵対する関係性から抜け出すことができて、いろんな人とお互いに仲良く、助け合って生きていくことができるわけであります。それにより、良い人間関係がつくられていくことになります。**

**アジアには「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があります。一人では偏りがある。三人の三つの違った考え方を統合すれば、生きた現実に近づけて、文殊の知恵すなわち仏の知恵に近づくことができるという考え方があります。欧米人は考え方が違ったら、どちらが正しいか決着をつけるという考え方。結局は対立するんですけども、アジアにおいては対立を乗り越えて、三つの違った考えを統合しないと本当の正しい考え方には近づけない、という考え方があるわけであります。これが謙虚な理性というやり方なんですね。**

**これからの時代は我々はどのように考えていかないといけないかと言うと、考え方が違うということはどういうことなのか。同じ考え方の人間と付き合っていたら成長しない。成長しようと思ったら自分と違うものを持っている人から自分と違うものを何か学んで、そして人間は成長するんだ。考え方が違うということはどういうことなのか。**

**考え方が違う原因は五つあって、体験が違うと考え方が違ってくる。経験が違うと考え方が違ってくる。知識や情報が違うと考え方が違ってくる。それから物事の解釈の仕方が違うと考え方が違ってくる。さまざまな人生の出会いの違いというものも考え方が違ってくる。どういう災害と出会ったか、どういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう人物と出会ったか、どういう本と出会ったかなど、さまざまな出会いによって人間の考え方や価値観は随分と違ってくるものであります。**

**体験と経験はちょっと似ているが、大きく違うものです。金八先生の武田鉄矢さんが昔やっていたCMで、マルちゃんのコマーシャルがあって、赤いきつねと緑のたぬき、ちょっと似ているが大きく違う、似ているんだけど内容がガラッと違うというもの。体験と経験も英語で言えば、両方ともエクスペリエンスなんですけど、日本語で言えば全然違うんですよね。体験というのは自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験というのはその体験から自分が何を学びとったか。体験と経験は次元が違う。ですから同じことを体験しても、その人の能力や人間性によってその体験から何を学ぶとるかっていう内容は違ってくるわけですね。体験と経験は別のもの、違う次元のものとして考えなければなりません。**

**とにかく、考え方の違いは、体験の違い、経験の違い、知識情報の違い、物事の解釈の違い、人生の出会いの違い。考え方や価値観の違いなんですね。ということは、相手が自分とは違う体験を持っている、経験を持っている。あるいは相手が自分とは違う知識情報を持っている。または相手が自分とは違う物事の解釈の仕方をしている。または相手が自分には無いさまざまな人生の出会いを持っている。そのことによって考え方の違いや価値観の違いが出てくるんだ、と言うことができます。ということは考え方が違うことで対立をしているとはどういうことなのかと言ったら、自分が成長するために学び取らなければならない、自分にはない何かを相手が持っているんだということ。そのことを教えてくれるのが対立なんだと。成長するために学び取らなければならない相手が誰なのかを教えてくれる現象が、対立なんだと解釈しなければならない。対立することを通して、対立から逃げないで向かっていって、「一体あいつは俺にない何を持っているのだろう。俺はあいつから何を学んだら良いのだろう」という意識で我々は対立という経験・体験をしていかなければならない。激しく対立しながら相手から何かを掴んだのなら、「今日は君と出会えて良かった。ありがとう」と言って、敵に感謝をする。これが対立を通して自分を成長させるやり方であります。**

**とにかく我々は謙虚な理性というものを原理にして、考え方が違うということを相手を敵として考えるのではなく、相手が自分にはない何かを持っているんだと、成長するために学び取らなければならない相手なんだとという意識で、自分を変えていかなければならない。普通は「どうも嫌な奴やなぁ」と思ってしまうのですが、それだけでは敵対心を持ってしまって、人間関係が悪くなってしまうだけですから、そうではなくて、「一体こいつは俺にない何を持っているのだろう。俺はこいつから何を学んだら良いのだろう」という意識で相手に対応しながら、向かい合えば確実に目が違ってくる。相手を見る目の色が違ってくる。この目の色の変化が、人間関係を激変させて、修復していくことになっていきます。相手の心も変えていきます。目の色が相手の心に影響を与えて、態度まで変えていく。謙虚な理性を持って生きるということは、違った考え方や価値観の人間と出会ったときにどうするかが一番大きな課題であります。このような生き方を我々はこれから覚えていかないといけません。これが人間が理性を支配して、使いこなして人間らしく生きるというやり方であります。**

**感性論哲学というのは理性論ではなく実践論ですから、「こうしたらこうなる」ということを実証的に語るというのが学問としての凄さであります。あとは、聞いたら良い話だなで終わるのではなく、自分でやってみてそうなるかどうか確かめること以外にないんですね。あとは実践するしかない。理想論や観念論ではない、実践論なんだ。「こうしたらこうなる」ということでしかない。あとは「そうしたらそうなるんだ」という学び方をしていくしかないのです。是非、やってみて欲しいと思います。**

**次は三番目、「人間に完全性を求めてはならない」。人間関係が壊れるのはついつい相手に完全性を求めて、相手のちょっとした欠点や失敗を責めるというところから人間関係が壊れるということになりやすい。常に人間は不完全なんだということをちゃんと知ることが大事な基本であります。人間は不完全なんだから失敗もするし、嘘もつくし、騙すし、裏切るし、罪も犯すし…と、いろいろと困った現象が出てくるわけです。それは不完全なるが故に出てくる避けがたいものであって、それを責めるのは相手を人間ではない者になれと言っているのと同じになってしまう。だから、我々は人間の不完全さを許しながらどう付き合っていくかを考えなければなりません。**

**よく嘘を言うということがある。普通、嘘を言うとなると、理性的な人間なら「あいつは俺に嘘を言った。もう信用できない」という反応になる。それはある意味で人間に完全性を求めてしまっている間違った反応なんだ。人間が本当に人間らしい心を持って生きていこうと思ったら、嘘を言われても裏切られても騙されても傷つかない心をつくっていかないと、不完全な人間とは付き合っていくことができません。嘘を言われてムカついているようでは人間ではない。ある意味では相手のことを思って嘘を言うこともあるし、良かれと思って嘘を言うこともある。また、自分を守るために嘘を言うこともある。言い逃れで嘘を言うこともある。とにかく、嘘を言うというのは不完全な人間にとっては避けられない行為、在り方である。**

**確かに嘘を言うことは、良くない。嘘を言ってはいけないのですが、だけども、人間とは不完全な生き物ですから嘘を言わなければならない状況に追い詰められて、嘘を言うということはよくあるわけです。それをどう理解して乗り越えていくか。自分が嘘を言うときにどんなに苦しむか、悩むかを考えてみる。相手が自分に嘘を言ったときに相手が嘘を言うまでに、どんなに悩んだか、苦しんだか、辛かったかがだんだんわかってくる。つい嘘を言ってしまうが、言いたくて言っているわけではない。そういう状況に不完全であるが故に追い詰められてしまう。それが自分の体験を通してわかってくる。そうすると、理性的な人間ではなくて本当に温かくて血の通った心のある人間であったのなら、どう反応するか。言いたくて言っているわけではない、不完全であるがゆえに追い詰められてしまって、つい嘘を言っているんだ。心ならずもという善良な心情が根底にある。結果として、「あいつが嘘を言うまでにどんなに悩んだか、苦しんだか、辛かったか」という気持ちが出てきて、相手を責めるよりも可哀想になる。それが心ある人間の反応なのです。「皆があいつを見放しても自分だけはあいつのことを見放さないで友達として付き合っていこう」という温かな心情が生まれてくる。これが理屈を超えた血の通った温かな心のある人間の反応なのです。**

**そうされた人間はどうなるかと言ったら、「皆が離れていったが、あいつだけは見放さないで友達として付き合ってくれた。今度何かあいつにあったらひと肌でもふた肌でも脱がないかんな」という理屈を超えた友情が生まれてくる。これを愛の奇跡と言うんですね。嘘を言った人間を信じようとする、この奇跡的な決断が理性にはつくり出せないような人間関係をつくり出していく。これが人間は不完全なものだとわかっている人の人生の美学と言えるものです。**

**今の社会の実態は、人間らしい血の通った温かな心を持った対応を忘れてしまって、嘘を言ったらいかん、裏切ったらいかん、罪を犯したらいかんという理性的な判断で接してしまっている。結果として多くの人が冷たい心の犠牲となって人生を棒に振る、誤ってしまう。皆が不信の目で見られたら人間はもう生きていけなくなってしまう。不信の目は殺す目だ。罪を犯したら罪を責められて、もちろん償いを求められて刑に服すことが当然の結果ですが、それだけで終わったのでは本当の人間らしさとは言えない。誰も犯罪を犯そうと思って犯す人間はいない。犯罪の根底には乳幼児期における親から受けた愛の欠如という残酷な体験がある。生まれたときは一点の曇りもない絶対的信頼という清らかな心を持って生まれてきた子どもが、やがて罪を犯してしまう…そこにはその子の罪とは言えない親の罪がある、また社会の罪がある。**

**だからと言って犯罪は許されるものではない。刑に服して終わってしまっては、それは理性的な裁きだ。日本には昔から大岡裁きという名裁きがあって、罪を憎んで人を憎まずというものがある。確かに犯罪はあってはならないけど、犯罪がなかったならば社会は発展しない。事故も犯罪もなかったら社会は停滞する。犯罪というのは社会の中にどんなに大きな問題があるのかということを明るみに出して見せてくれるという働きがある。我々は犯罪者からも学んで、そしてこの犯罪から社会はどのように変えていったら良いのか、ということを考える対応をしていかなければならない。そうしなければ、犯罪の持っている本当の意味を我々は見逃してしまう。犯罪者にも感謝をしなければならない。どんなところにもプラス面とマイナス面がある。マイナス面だけの出来事はない。とにかく、人間に完全性を求めるという冷たい非人情的な意識を持ってしまっては、自分自身が社会を暗くするような片棒を担いでしまう。我々は人間が不完全であることを認めて許すべき。そういう意識を持って、決して人を責める気持ちだけで終わってしまってはならない。あらゆる心の根底には、心ならずもという善良な意識が働いてることも知らなければならないし、我々は本当に人間として人間らしく人生を生きていこうと思ったら、嘘を言われても騙されても傷つかない強い心をつくってかないと、この娑婆世界を生き抜いていくことはできない、このことも知っている必要があると思います。**

**先ほど申し上げたことですけど、人間は偏見から逃れることはできない。どんな立派な人間でも偏見がある。そのことによって謙虚さを持って、独りよがりな独善的な考え方に陥ってしまうのではなくて、自分と違った考えからも学んで自分を成長させるという謙虚な生き方を自分自身もしていかなければならない。これが不完全性の自覚に基づく生き方ということになるわけですよね。人に完全性を求めてはならないだけではなくて、自分にも完全性を要求してはならない、自分を常に不完全だということを知っていることが大事である。人も不完全だ。そのことをちゃんと認めなければならない。本当に不完全であることを知っている人間は、自分にも他人にも優しくなれる。介護の精神の根底にある原理なんですね。本当に人間は不完全であることを知っている人間は、自分にも他人にも優しくなれる。ついつい介護の現場で介護者が入居者を責めてしまうことがあります。それもある意味で相手に完全性を求めてしまっている結果出てくる苛立ち・ムカつきなんですね。本当に人間は不完全であることを知っているのなら、ほとんどのことは許せる・受け入れられる。人間は不完全であるということを忘れてしまうことで人間は人を責めるような醜い状態に陥ってしまう。**

**とにかく、人間に完全性を求めてはならない。これも良い人間関係をつくっていこうと思ったら、大事な原理であります。ついつい人を責めてしまう。責める心は醜い心。責め合ったら地獄。これから我々は許し合って生きる愛に基づく社会をつくっていかなければなりません。**

**よく子どもが小さい頃親に嘘を言うことがあるんですよね。普通のお父さんお母さんは嘘はダメじゃないかと叱ってしまうんですよね。もちろん嘘を言っていいわけがないんですけど、「嘘はダメ」と言われると子どもはどうなるかと言うと、嘘を言ったのは子どもですから子どもが一番知っていますから「嘘はダメ」と言われても「嘘を言うたらいかんことぐらいわかってるわ」と。「なんで嘘を言わないといかん状況に陥って苦しんでいた俺の心をお父さんお母さんはわかってくれんの」という心情が湧いてくる。そのことによって「お父さんお母さんは俺のことをわかろうとしてへん。お父さんお母さんには何を言っても無駄や」と親に何も言わなくなってきて、だんだんと友達とつるんじゃったりなんかしちゃったりして、いつのまにか暴走族になってたり、ヤンキーになってたりと、そういうことになってしまいかねないわけですよ。嘘を言った子どもにどう対応してあげるのが、本当に親としての血縁という理屈を超えた命の繋がりを持った人間の愛の表現の仕方なのか。嘘を言った子どもに、まず「嘘はダメ」という理性的なことを言ってはいけません。まずは嘘を言った子どもを抱きしめて、「ごめんね、許してね」と言って、子どもを抱きしめて涙を流して、「なんで親なのにあなたの辛さを早くわかってあげられなかったのか、ごめんね」と。そうすると、子どもはどうなるかと言うと、「やっぱりお父さんお母さんや。俺の辛さがわかってくれている、有り難い」と思って、初めて理屈を超えた血縁に基づく親の愛が子どもの命に染み込むんですね。自分は愛されていると実感としてわかる。ますますお父さんお母さんを信じて、好きになっていく。でも、まず理性的なことを言われると、親に対する信頼感が吹っ飛んでしまう。本当に人間として子どもを育てようと思ったら、その次にどうするか。「だけど、やっぱり嘘を言ってはいけないよ。今度、嘘を言わないといけない状況になったら、必ずお父さんお母さんに相談をしなさい。どんな問題でも一緒に乗り越えていきましょう。親子じゃないの」と言うことが、子どもを立派な人間らしい心を持った存在に成長させる愛の教育なんですよ。**

**よく会社内で使い込みなど犯罪が起こることもありますが、普通ならば犯人を捕まえて辞めさせて一件落着なんですけど、それは理性の裁き。本当に愛のある、血の通った温かな心の裁きとはどういうものか。経営者はその罪を犯した人間を捕まえてどんな対応すべきかと言うと、「確かに君の行ったことは悪いことだ。だけど俺はある意味で君に感謝をしている。なぜなら君がその犯罪を犯さなければ、我が社の大きな問題点は明るみに出ることはなかった。だから君の犯罪を無駄にはしない。この経験を活かしてもっと良い会社をつくってみせる。だから、君が罪を償って刑務所から出てきたのなら、また我が社に帰ってきて一緒に会社の発展のために協力をしてもらいたい。俺は待ってる」…なんて言ってみたりして、裕次郎みたいに。そして、刑務所に送り出すわけですね。これが罪を憎んで人を憎まずという日本流の温情のある裁きの一例であります。**

**どんな犯罪も社会や会社の問題点を明るみに出すという自己犠牲的なもの意味を背負っているわけです。そういうことも…これは極端な例でありますが、考えて人間には対応していく必要があります。犯罪にもいろいろな理由がありますから、その背景にある心情もわかっていないと、それが裏目になって返ってくるということも恐れとしてはあるわけであります。とにかく、血の通った温かな心は、どういう風にしたら表現できるのかをもっと仕事上でも考えてみる必要があると思います。**

**次は第四番目ですね、「勝つことよりももっと素晴らしいことは力を合わせて共に成長することである」。これまでは、勝つことが最高の喜びであり、勝つことは最高の価値あって、負けておってはちょっと話しにならんということで、いろいろ皆頑張ってきました。だけど、競争心というのがいかに人間の心を蝕むかということがはっきり今はわかってきております。勝とうとすることによって、人間としての温かみのある心が消えてしまって、相手に対して非常に冷淡冷酷に接する気持ちになってきて、人間性がなくなってしまう。受験競争を見るまでもなく、競争意識がいかに心を蝕むかというのが証明されてきました。そういう意味でも競争をして勝つという成長の仕方は明らかに役割を終えてしまった原理だと言わなければならないと思うんですね。**

**もちろん勝つことも素晴らしいんですよ。だけども、これからはもっと素晴らしい生き方を求めていかなければならない時代に入りました。今、グローバル化という状況を世界は迎えて、まだまだこれから国際的な大競争が始まるんだと、まだ競争心をあおるような生き方を求められているような状況があります。だけども、やっぱり競争をして勝とうとすると、どうしても人間性が醜くなると言うか、悪賢いような理性の使い方が出てきてしまうんですよね。昔、アメリカの女性スケート選手の中で、あの人がいる限り自分はトップになれないということで、自分よりも上の力を持ったスケーターを誰かに頼んで、傷害というか事故に合わせてしまって、大会に出場できなくさせてしまって、自分がトップに立とうと計画した人がいたんですね。その計画は明るみに出てしまって、判ってしまって成功しなかったんですけど、そういうことすら考えてしまう。競争心はとんでもない悪い心を引き出してしまうことがあります。**

**実際問題、会社の中でも自分より上の成績を上げた人を蹴落とすためにスキャンダルを捏造するとか、いろんな悪い計画を立てて、相手を陥れることが考えられることもあります。経済活動においてもお金を目的に働くという労働の仕方をすると、やっぱり人間は悪賢くなるんですよね。感性論哲学では人間の働く目的は金ではない、なぜ働くのかと言ったら自分自身を本物の人間性を持った人間に成長させるために働くんだと考えています。働く目的は自分自身を人間として成長させるためだ。金ではない。自分自身を本物の人間に成長させるためには、我々は意志と愛の実現に労働の目的を見出さなければならない。意志を実現するとは、仕事によって成功することだ。愛を実現するとは素晴らしい人間関係をたくさんつくること。仕事を成功することと素晴らし人間関係をたくさんつくるというのは、命に内在する目的であって、お金を目的に働けば必ず人間は悪賢くなる。お金を目的に働くことによって自分の志・意志を放棄して、また金を目的にすることによって真実の愛を捨てて、金のある人間と結婚する…そういう間違った選択をしてしまって、自ら不幸を呼び寄せる。金を目的にすれば人間は不幸になる、悪賢くなる。それと同様に勝とうとする意識が強いと、そのことによって悪巧みや悪い心が芽生えてくる。人間性が悪くなる。それにより、これから我々は勝つことよりもっと素晴らしいことはなんなのかということに目覚めていくことが求められています。**

**スポーツにおける勝ち負けというのは人間性が悪いということではなくて、相手が打てない球を投げようとするのは技術の問題であって、悪賢いということではないのですが、実際問題、相手のチームが失敗すると喜んで、相手の失敗を喜んで味方の失策を残念がる…その心情はあまり良くない心情ではないかと思うんです。どうしても相手の失策を喜ぶ、相手の欠点を突こうとする、そういう研究をする。なんかそこにちょっと人間性としてあまり好ましくないなと。それは人間性の問題ではなく、スポーツの技術の問題なんだと言われればそうなんですけども、だけどもやっぱり欠点を突く、弱いところを突く、失敗を喜ぶなど、そういう気持ちはどうしても勝ち負けの中には常に伴って出てくる現象なんですね。とにかく、これからスポーツと言われるものの観戦や勝ち負けと言われるものの考え方も、少しこれからは改めていかなければならないところがあるんじゃないかなと、思っているわけであります。**

**そういうことも含めて、勝つことよりもっと素晴らしいことはなんなのか。それは、力を合わせて共に成長することだ。勝ったら負ける者をつくってしまう。だけども、力を合わせれば共に成長できる。これが新しい時代の成長の仕方であり、新しい時代の発展だ。特に人間性の成長においては、勝ち負けというある意味動物的な生き方から、力を合わせて共に成長するという人間的な文化としての生き方に大転換していく。そのことが今望まれてるんじゃないかと思うんですね。そういうところから、競争という価値観から統合という価値観が生まれてきてます。統合というのは、異なるものが力を合わせることによって出てくる相乗効果を成長・発展・利益として考える。そういう行動の仕方が全世界を動かし始めているわけですね。競争して勝つ、競争心ではなくて統合能力を磨く。力を合わせて共に成長していくという生き方を自分自身が先立ってやっていくような、総合能力を磨くというようなことが、これから非常に大事な課題になってくる。**

**会社の中の仕事でも、誰と誰を一緒に仕事をさせたならば、もっとも気分良く働けて、最も能率が上がるか、人間同士の組み合わせも考えていかなければならない。これは人的労働環境の整備と言うんですけど、普通、労働環境の整備と言うと働く場所の整備という形で考えられやすいんですけど、最終的な労働環境は人的労働環境ですね。誰と一緒に働けば最も心良く働けるか、最も能率が上がるか。人的労働環境の整備が、これから大事になってくる。特に少数精鋭という企業をつくっていこうと思ったら、ひとりの人間の持っている力を最大限に活かすということが非常に重要視されてきますので、そういう意味でも最も気持ち良く生きがいを持って働ける、そういう労働環境を人間関係の組み合わせを通してつくっていくことも、考えなければなりません。つまり、統合ということがこれから大事になってくるわけですね。競争から統合へ。その新しい価値観が今人類を支配し始めている。とにかく、勝ったら負ける者をつくってしまう。だけど、力を合わせたら共に成長できる。そういう価値観に基づいて、いろんなことをやっていくんですね。勝とうとすると悪賢くなってしまうけど、共に成長できる関係性を見出していこうと思えば、そこには愛が生まれてきますからね。全く違った生き方が出てくると思います。**

**最後の第五番目ですね、良い人間関係をつくる最後の第五番目は「ユーモアのセンス」ですね。ユーモアというのは人を笑わせたり、楽しませたり、人に希望を与えたり、勇気を与えたり、そういうことをユーモアと言うんですけど。ユーモアというのは、理屈を超えて人の心を結びつける原理。ユーモアを言うと、大体相手に好かれる。そういうこともあって良い人間関係ができていきます。ユーモアの反対はブラックユーモアですから、ブラックユーモア=恐怖や不安を与えるものですけど、安心や癒やしや勇気や希望や笑いや楽しさをつくり出せるのがユーモア。ユーモアを言うというのは、一種愛の努力によって生まれてくる能力ですので、ユーモアというのは理屈を超えた素晴らしい人間関係をつくる、心の結びつきをつくる働きをします。特にユーモアというのはヒューマンという言葉と近い、親戚関係の言葉なんですよね。ユーモアとヒューマン、humまで同じ綴りですから。ユーモアがあるというのは、ある意味で人間性があることと結びつくわけですね。特にユーモアの中に笑いがあるわけですけど、笑うというのは人間だけだと言われています。最近は馬もチンパンジーも笑うという動物学者も出てきていますが、笑う=意味がわからないと笑えない。だから、意味を感じることができるのは人間だけなんですよ。馬やチンパンジーが笑っているように見えるのは、気持ちが良いから歯をむき出しにしているということだけの話なんですね。見た目が笑っているように見えるだけ。とにかく、ユーモアには理屈を超えた素晴らしい人間関係をつくる、心の結びつきをつくる働きがある。ユーモアがあるとは人間性があるということができる。**

**そういうことも含めて、もっともっと我々はユーモアを言うことができる力を養うことは大事な良い人間関係をつくるための能力だと考えることができると思います。私が言っているようななんちゅうか本中華冷やし中華とか、セントバーナードというのはユーモアじゃなくて、ダジャレなんですけどね。よく言われる親父ギャグという部類のもので、あまり皆さんを退屈させてはならないと思うので、ちょっとダジャレでも言って笑ってもらおうかなと思ってるんですけど。これも一種の愛の発露で言わせてもらっていることなので、一応認めてもらいたいんですけど、だけども、これはあまりにもレベルの低いダジャレですので、本当のユーモアというのは、ちゃんとした筋書きのもと人を感動させるようなことで、教養が背景にあるもの。ユーモアは欧州の精神から生まれてきていますので、もっともっと我々は欧州の映画を観たり、小説を読んだりしてユーモアの精神、本質というものを学んで取り入れていったら勉強になるかという風に思っております。とにかく、ユーモアを言える人間に成長していってもらったら、もっと素晴らしい人生がつくれるんじゃないかと思います。今日は良い人間関係をつくるためにはどういう努力をセントバーナード、ということをお話しさせてもらいました。どうもありがとうございました。**